月報　第一五号　バッハ合唱団　一九六三年九月

バッハのリズムと「時」

辻　壮一

器楽曲・声楽曲をとわず、バッハの音楽には、ふしぎなリズムの魅力がある。こころみにブランデンブルク・コンチェルトの第三番や第六番それから口短調ミサのクルチフィクスス のところをきいて見られるが良い。これらの曲ははじめから終りまで、バッハほどの力量のない人がつくった音楽においては嫌悪の情をひきおこしかねまじき単調なリズムで支配されている。バッハにおいてはこの単調なリズムが全く気にならないばかりか、この単調さがかえっておそろしいほどの精神的なエネルギーになって、きく人の心を充たす。このエネルギーが飽和したとき、その曲はアラルガンドになって終止する。バッハのアラルガンドはこのような意味をもっていることによって他のバロック作曲家のアラルガンドとは区別される。

なにゆえにバッハの単調なリズムが心的エネルギーとして受けとられるのだろうか。わたしの考えによると、それはバッハの抱いていた「時」の観念が他の作曲家とちがっていたからだ。バッハの「時」は天地創造にはじまり、最后の審判によって終る有限の「時」である。この有限のときのきわめて小さい部分がわれわれ人間によって経験され得るのであるが、このわずかの、無限小の「時」をバッハは音をもって充実させることによって、神への奉仕をしようとしたのであろう。神が人間に与えた「時」をむなしくせず、これに意味を与えるのが、人間のなし得る奉仕である。バッハは神学者ではないから、このことを観念的には頭にうかべなかったろう。しかし彼は実践によって、最高の奉仕をしたのである。したがって彼の作曲は最高度の緊張感に溢れている。これが特にリズム すなわち「時」の形式化にあらわれたとき、われわれは心的に巨大なエネルギーを感じるのであると思う。

バッハの音楽をむやみにキリスト教的に解釈することは、むやみにキリスト教から切りはなそうとするのとひとしく暴挙である。バッハが幼時から受けた宗教教育を念頭におくならばバッハのリズムを「時」にむすびつけて考えることもまんざら虚構ではあるまい。

バッハに至るまでの「オラトリオ」の発展

オラトリオの起源は聖僧フィリッポ・ネーリが16世紀の半ばにローマの聖ジロラム・テラカリタ寺院の新禱所でオラトリオ（新禱）の集会をはじめた時にはじまる。この集会は信徒の教化を目的とし聖書の朗読、説教のほかラウデイー（中世に起源をもつ民衆的宗教歌）の詠唱を内容としていた。ラウディーはしばしば歌手が幻想的な衣装をまとい自分の演ずる人物や神（性）、徳や悪徳を視覚的に表わしながら劇的な対話の形で歌う形をとった。近代のオラトリオはそれから発展していった。パレストリーナ

をはじめ16世紀の有名な作曲家達はネーリに協力しその時の作品を書いたといわれているが、実作品は残っていない。現在最も初期のオラトリオと認められているのはカヴァリエリ（ローマ c.1550～1602）の「霊と肉の劇」1600である。しかしこの作品は音楽的スタイルにおいてペリ（1561～1633）、カッチーニ（c.1545～1618）等の初期のオペラに近く中世の神秘劇、道徳劇の継続と見るべき面を多分にもっているのであしろ宗教的オペラと云うべきである。オラトリオの真の伝統を開いたのはG.F.アネーリオ（1567～1630）の「美しき魂の劇」1619である。この作品は洗練されたマドリガールのスタイルの合唱とソロの部分を交替させた作品で、ソロのパートには既に語り手があらわれている。なお当時の注目すべき作品としてはマニッリオの「聖マリア・マッダレーナの歌」1640ころがあり、リブレットはそれまでのラテン語を離れて俗語のイタリア語で書かれている。

その後17世紀半ばに入ってカリッシミ（1605～1674）（作品「イェフテ」、「ソロモンの裁き」「ヨナ」）の活動で作品の長さにおいても、興味の深さにおいても真のオラトリオの名に価する作品を書いた。

ドイツ風のオラトリオの伝統を開いたのはハインリッヒ・シュッツ（1585～1672）で彼の作品には「復活オラトリオ」1623、「アーノルド・シェリングによって1808年に発見された「クリスマス・オラトリオ」1664がある。このクリスマス・オラトリオは1世紀後のバッハの「クリスマスオラトリオ」と形式はちがうが芸術的には肩を並べるすぐれた作品である。その後バッハに至るまでにはタイレ（1646～1724）、セバスチャーン（1622～1683）の活躍があるがこれらの作品はむしろ受難曲の形式に近く、ヴェックマン、ブクステフーテ、ローゼンミュラー等の作曲家はオラトリオより形の小さいカンタータの形式を好んだのでシュッツによってはじめられたドイツ・オラトリオの伝統は大バッハの受難曲につづくものである。バッハと同時代のテレマンは「審判の日」という作品を残し、バッハの息子達の内、J.C.F.バッハは「イエスの幼年時代」と「ザロの復活」を、C.P.E.バッハは「荒野のイスラエル人」1775と「イエスの復活と昇天」1787を残している。この作品は大バッハとハイドンのオラトリオの間の遺環を形づくるものとして注目すべき作品である。

こうしたオラトリオは常にキリスト教国の民衆の永続的な心の糧として（イギリスで数多くのオラトリオを残したヘンデルはこれらの作品を劇場の僅し物扱いされている四旬節から復活祭までのレントの期間に演奏されるべく作曲している）、それぞれの時代に合唱音楽芸術の最高峰（作曲技法や崇高な様式の中に充実したドラマティックな緊張感など）をきづいてオラトリオの伝統を高い水準でハイドン・メンデルスゾーン等の不朽の名作が物語っている通り後世にバトンを渡されている。

（平凡社音楽事典「オラトリオ」の項より）

9月行事

1日(日) 午後4時～6時 例会

10日(火) 鈴木正久牧師より伊勢招待をうけ、レコードをきく。午後6時 伊勢の水族館集合。詳細別紙

16日(月) 磯谷厩先生発声レッスン

23日(月) 団員・団友・後援会員のつどい。詳細別紙

30日(月) 第4回バッハゼミナール

◇ 10月5・6日(土・日) 霧氷岳・蔵王牧場の団員合宿（詳細別紙）申込を受けています。35名で〆切ります。（責任者 S2 小山・S4 柳澤・A1 [illegible]）

団員名簿追加

S17 木林敏子（13グループ）

S18 秋葉清子（9グループ）

A11 内田 碧 S19に変更

A17 月報第14号に島田恵子とあるのは鳥田恵子の誤り

T8 長谷川 洋也（3グループ）

T9 宮尾 泰正（1グループ）

野尻湖合宿を終えて

T6　西村情志

準備中は参加者の数とか、会場の様子とかその他いろいろな点で分らないことが多く、内心かなり不安に思えていた合宿も、すべてが予想以上に都合よく運び本当によかったなと思っています。ただし、往き帰りの汽車とも立ち放しで、忍耐に忍耐を重ねて下さった皆さんの体力及び精神力が伴ってこそ始めて成り立ったのだということを思えば、準備に関係したものとしては来年は決してそのようなことのないように貸切バスなどの方法で必ず坐って行けるように手筈よくしなくてはならないと、悔く感じたところです。

さて、本題に入りますが、今度の合宿で一番よかったなと思われたことは、これは皆さんが一致してそれれたことですが、お互いによく知り合うことが出来たことだと云えます。我々の合唱団は、一見、お互いが親しそうでいて、意外にそうではなく名前さえも知らないお互いが案外に多くあるらしいのです。その点、三日間同じカマの飯を食べたのですから、名前ぐらいは嫌でも覚えてしまいます。こんなことは普段でも出来そうなことのように見えますが、なかなかむずかしいことかも知れません。

ですから、合唱団の合宿としては、たいへん消極的な収穫のように見えますが、今後の活動の上に、このことは大いにプラスとなるのではないかと思います。次にプログラムの点ですが、これは、まあまあといったところでした。特に問題になったのは自由時間が長すぎるかどうかということでした。確かにもう少し自由時間についてはお互いに工夫があったらなと思われますが、なにぶん遊び下手は勤勉を誇る日本人には、ついてまわることなので、来年からはもっと短くした方が、良いかもしれません。練習時間については、今回は夜の練習をやらなかったのですが、一説によりますと、夜の練習は心身共に最良のコンディションになって、非常に有効的な練習が行えるとのことですから、この点を来年は考慮した方が良いと思います。練習内容は、特に発声の練習を一人ずつやりましたが、その成果は各自まちまちでしょうが、とにかく普段はなかなか出来ないことを行うことが出来ました。また普通の練習も時間通りきびしくと行いましたので、いつものバラく式練習法よりは、大分能率が上ったように思います。この点は心がけ次第でいつでも出来るのですからお互いに心しなくてはならないところです。

次に場所のことですが、たいへん好評で、是非来年もということになってしまい、既に予約までしてしまったとのことです。野尻湖はたいへん気に入った湖ですし、それに少々声を張り上げても嫌な顔はされませんし、またボートをいつでも夕ダで好きなだけこげるというのも魅力でした。

以上、断片的に思いついたことを書いてしまいましたが、終ってしまってから考えつくことは、あすれば良かった式のことばかりで、なんだか、すぐにでももう一度やり直したくなるような気がします。しかし、僕自身はもちろんですが参加された皆さんが、大へん楽しい充実した四日間であったと思われたことには間違いありません。

出席者　森井恵美子

団員　有賀・小山・福場・新井・佐竹・田代・坂本・竹田・長谷川・秀林・松本智・森・内田・井口・上田・斉藤信・堀・西村・赤羽・山下・若山・斉藤祥・飯島（23名）

団員外　福井千晴・田中その・大平とし子・秀林道子・秀林明子・有賀まみ　（6名）

「クリスマス・オラトリオ」

第五部　歌詞

(10) シンフォニア

(11) テノール叙唱（ルカ2・8−9）
この地に野宿して夜　群れを守りおる牧人らの
ありしが　みよ　あまつ使来たり
栄光あたりにみちたれば　いたくおそる

(12) コラール
きよらの曙　光をはなて
牧人おそるな　使昔ぐるを
「このみどりごこそ　われらがなぐさめ
悪魔を敗る　平和の主なり」

〔詩・J. Rist: Ermuntre dich, mein schwacher Geist, 1641. 第9節
曲・原曲　J. Schop 1641.〕

(13) テノール／ソプラノ　叙唱（ルカ2・10−11）
使かれらにいう「おそるな　みよ　大いなる
喜びを　我なんじらに昔ぐ　今日　ダビデの林
にて　なんじらの救主　キリスト　生まれたまえり」

(14) バス叙唱
み神はアブラハムに　昔約せしことを　いまな
したもう　一人の牧人　世にさきだちて　誓いの
みわざの　なしとげられしを　昔ぐしらさるるな
り

(15) テノール詠唱
牧人らよ　ゆけやゆけ
ためらわずゆきて　まみえよ
やさしきみ子に

(16) テノール叙唱（ルカ2・12）
ゆきて喜び　やすらぎを得よ　きよめよ心
みどりごは　布に包まれ　馬槽に臥しおらん
そをなれらは見ん

(17) コラール
いぶせきうまやに　光みちみちて
いときよきみ子の　いこい給うまみよ

〔詩・P. Gerhardt: Schwingt, schwingt was ist hier Wunder dir, 1667. 第8節
曲・Von Himmel hoch Leipzig 1539.〕

(18) バス叙唱
されば汝ら　牧人よ
とうとき御子　あらぎく馬槽に臥し給えるまみよ
声あわせ　やさしき歌をうたえ
いこい給う　御子のかたえに

(19) アルト詠唱
ねむれ　いとしきみ子よ　いこえ
あがめて　またき栄えをうけよ
さわやかに　めぐめよや
わがいも　よろこばん

(20) テノール叙唱
たちまち使に　天の軍勢加わり
ほめたたえいう

(21) 合唱（ルカ2・14）
はえあれ　み神に
地には平和　主の民に

(22) バス叙唱
この日なしとげられしことを　使ら歌う
されば　われらもともに　歌いよろこばん

(23) コラール
使とともに　われらほめ歌わん
待ちにし客人（まろうど）　いましゃたれりと

〔詩・P. Gerhardt: Wir singen dir, Immanuel, 1656. 第2節.
曲・Von Himmel hoch, Leipzig. 1539.〕

◇後援会員の西川恂・関根孝子両氏は、この程フランス政府給費留学生としてストラズブールに留学されることになりました。使徒は、西川さんは経済史、関根さんは西洋史です。前途の平安・活躍を祈ります。